

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）

平成 28 年度大学院薬学研究科博士課程・論文要旨

## 題目：漢方治療に対する経済評価の現状

博士課程 医療・生命薬学専攻

学籍番号：13R3003 氏名：今井 太郎

研究指導教員：池田 俊也 教授

キーワード：漢方 経済評価 費用対効果

### 研究の背景と目的

現在、急速な高齢化、経済の低迷から、医療費への関心が高まっている。厚生労働省の発表によると、我が国の医療費は 2014 年度では 40.8 兆円となり、前年比 1.9%と過去最高を更新した。

そこで、医療費の約 20%を占める薬剤費を節減するために、後発医薬品の使用推進などの対策が始まっているが十分とは言えない。そのような中で、漢方治療による医療費削減効果がたびたび指摘されており、漢方治療の経済性を検討することが重要な課題と考えられる。

そこで今回は、日本における漢方治療の経済性に関する論文をレビューするとともに、漢方治療の臨床的エビデンスを報告した論文を元に、漢方治療の経済性に関する現状を把握することを目的とする。

### 方法

<研究 1 >

医学中央雑誌 Ver.5(医中誌)を用い、1983 年から 2013 年 11 月までに日本で実施され、費用対効果を経済評価した文献を検索した。検索用語には「漢方」「経済」と「漢方」「費用」を用いた。2 つのスクリーニングを行い、漢方薬の経済評価とは関係のない文献を除外した。得られた対象文献から①文献種別、②研究デザイン別、③費用の種類、④疾患別、⑤医療機関の種別、⑥臨床効果と費用の結果を解析・評価した。

<研究 2 >

本研究のデザインは日本東洋医学会がまとめる漢方治療エビデンスレポート 2013—402 の RCT— (EKAT2013) と EKAT Appendix 2014 を利用した。始めに 418 論文から西洋薬と漢方薬の治療効果を比較している研究を抽出し、検索の対象とした。その中で、漢方薬使用群の治療効果が同等、少なくとも同等、もしくは有意に優れているものを抽出し、収集・分析した。項目は①論文の発表年度、②研究デザイン、③サンプル数、④疾患別、⑤漢方処方名、⑥費用とアウトカムの比較、⑦疾患別 (ICD-10) とした。

薬価は 2016 年 10 月時点のものを使用した。薬価計算は原則先発品を採用し、漢方薬のメーカー記載がない場合はツムラのものとした。薬価に記載されている医薬品のみを対象とし、治療とは言えないもの、薬剤費の判断が困難なものは除外した。用法・用量の情報が不足している場合は、その疾患における一般的な投与量と仮定した。

### 倫理上の配慮

本研究は公表資料に基づく研究であり、倫理審査の必要性には該当しない。

## 結果

### <研究1>

医学中央雑誌 Ver.5 の検索により 228 文献が検索された。スクリーニングにより、22 文献、総数 27 件の結果が得られた。得られた 27 件を比較研究について分類し、前後比較が 8 件、群間比較が 14 件、予測が 5 件であった。

得られた 27 件のうち、臨床効果が上がり、費用も削減できたものは 8 件、臨床効果が上がり、費用が増加したものは 1 件、臨床効果が同等でコストが削減できたものは 5 件、臨床効果については記載なく、費用は削減できたものは 12 件、判断が困難なものは 1 件であった。

### <研究2>

EKAT2013 と EKAT Appendix 2014 から西洋薬と漢方薬を比較した 120 論文を抽出した。経済評価の困難な 23 論文を除外し、97 論文を得た。1 論文から複数の比較ができる 7 論文を追加し、最終的に 104 件を得た。

疾患別では、インフルエンザが 9 件と最も多く、かぜ症候群、肝炎、皮膚掻痒症、産褥が 5 件と続いた。漢方処方においては、六君子湯が 10 件、柴苓湯が 8 件、麦門冬湯が 7 件、小柴胡湯、柴朴湯、麻黄湯が 6 件と続いた。

費用とアウトカム比較の結果、漢方薬の方が安価で、効果が有意に優れているものは 8 件、同等、少なくとも同等のものは 12 件であった。西洋薬の方が安価で、漢方薬の効果が有意に優れているものは 42 件、同等、少なくとも同等のものは 27 件であった。漢方薬の方が安価な論文 20 件においては、西洋薬を基準にして最大 96%削減、最小で 3%、平均で 71%の削減となった。

## 考察

漢方治療の経済性に関する論文をレビューした研究 1 においては、漢方薬を使用することによって薬剤費や薬剤数の減少、治療日数や入院日数の短縮など、経済性にも有効性にも優れているとする文献が多かった。一方、漢方治療の臨床的エビデンスに関する論文に基づき薬剤費の比較を行った研究 2 においては、漢方薬が必ずしも経済的に優れているとは限らなかった。

漢方薬の 1 日量薬価はツムラ芍薬甘草湯 54 円からツムラ柴苓湯 429.3 円と幅があり、承認から時間が経過している医薬品は西洋薬が安価となる結果が多かった。漢方薬最安値の 54 円以下は西洋薬の 54% (56/104 件) であった。漢方薬の方が経済的にも安価で、アウトカムも有意に優れているものは呼吸器系の疾患に多かった。特にインフルエンザに関して、麻黄湯はオセルタミビルや、ザナミビルなどに対し、大きく費用を削減することができるとしている。

但し、西洋薬の方が安価であっても、漢方薬の効果が有意に優れているものについては、漢方薬の使用により薬剤費以外の費用を削減できる可能性もある。今後、薬剤費以外の医療費や間接的費用に与える影響についても検討を行う必要がある。

## 結語

本研究において、西洋薬を漢方薬に変更することによって、医療の質を向上させながら医療費削減につながる可能性が示された。漢方薬の特性から経済性と有効性だけでなく、QOL の改善も期待される。より経済的な評価をするためには、薬剤費の他にも検査料や調剤費、介護費、人件費などの生産性損失を考慮した間接的費用の設定や客観的に評価できるエンドポイントの設定を積極的に行い、漢方薬の医療経済的有用性を示していく必要があると考えられる。